

「歴史は繰り返す」

立石 真結美

どこの誰が言ったか知らないが、これほどまでにこの言葉を痛感したことはない。疫病、暗殺、戦争、天災、不況。全て、令和に入ってから経験したものだ。小学生の時、歴史の教科書で学んだ遠い昔々のお話であったはずの事が、今日の前で起こっている。

パンデミックや天災を予測することには限界があり、いつ自分が被災者になってもおかしくはないと思う。が、「平和ぼけ」しすぎだろうか。まさか、この現代において、国同士の戦争が起こるとは心の底から思っていなかった。

いつものようにテレビをつけると、そこに映し出されていたのは、荒廃した町の景色、難民として故郷を離れることを余儀なくされた何百万人もの人々。

私が現在医学を学んでいる長崎大学坂本キャンパスは、爆心地から 550 メートルという至近距離で被ばくした。破壊されたウクライナの町をテレビで見たとき、フラッシュバックするかのようになんか通っている大学の被爆直後の映像と重なった。原爆が、核爆弾が、再び使われるかもしれない。その時感じたのは、生物としての恐怖だった。

もう2度と戦争は起きない、ましてや核兵器「なんて」、それは都合のいい幻想だった。

地球の資源には限りがある。そして、人間である以上、自分や自分の家族、自分の国の利益を優先したと思えば、幸福を追求しようとするのは、当然である。限りある資源と個人の利益を追求しようとする人間。これらがそろったとき、そこに争いが起こるのは想像に難くない。しかし、我々人間を人間たらしめているのは、そこに理性があり、道徳があるからだ。力比べだけで結論をつける動物と違い、話し合い、協力することができるのが人間である。このことが、本来1対1の力であれば簡単に負けてしまうはずの人間が、今日まで生き残ることを可能にした。

だが同時に、歴史は集団の中で平和を保つ難しさを語っている。私が空気のように当たり前だと思っていた「平和」、それは全く当たり前のものでなく、多くの先人たちの犠牲と努力によって保たれているものであった。

国会で、指相相撲で勝った方の意見が通る、という仕組みがあったとすればどうだろうか。

「そんなものあり得るか」と鼻で笑うかもしれない。だが、沢山の人を殺し、沢山のものを破壊した方の意見が通る。それが戦争だ。指相撲国会とどう違うというのだろうか。これが狂気でなくてなんだというのだろうか。

戦争は、その時の実害だけでなく、その後何十年何百年と、心理社会的、公衆衛生的に甚大な影響を及ぼす。ストレス、飢餓、適切な医療の欠如が、心的外傷後ストレス障害、うつ病、不安などの精神状態に加え、高血圧を含む心血管疾患の増加と明確に関連していることが多くの研究により明らかになっている。実際、難民や移住者の集団において、心血管疾患の発生率が5倍に増加することを示した研究もある。

一人の命を救うのがどれだけ大変なことか、医療従事者でなくとも、パンデミックの中、日々報道されるコロナウイルス感染による多くの死亡者から、誰もが認識したはずである。それにもかかわらず、冷静に考えれば、誰もが異常だと理解できることが、国単位で、何度

も繰り返され、今も現実に起こっている。それほど、平和を保つのは難しいのだ。平和が脅かされて、初めてそのことを痛感した。

平和について、戦争について、一人一人がもっと真剣に考えなければならない。人間は詰まるところ、自己中心的な生き物で、しばしばその判断を間違ってしまう。そして、環境問題、食料問題、経済問題、問題問題問題、、挙げていくと切りがない。しかし、人間は間違いから学び、互いに話し合い、協力しあうことで問題を解決することもできる。実際、歴史は、私たちが多くの問題を乗り越えてきたこと、乗り越える力があることを教えてくれる。私にできることは本当に微力かも知れないが、決して無力ではない。まずは自分の身の周りの出来事への意識を変えたいと思う。

「人類よ、戦争を計画してくれるな」これは永井隆の著書、「長崎の鐘」の一節である。原爆により破壊され尽くした町の中で、自らも白血病に冒されながら、懸命に被爆者らの治療に奔走した彼が最後に残した言葉である。この言葉は、戦争の本質を言い表していると思う。つまり、戦争は、計画されるものなのだ。突発的に起こるものではない。小さな火種が集まって、やがて大きな火事となる。仲間はずれやいじめ、ネットでの誹謗中傷。何も目に見える力によるものでなくとも、このような小さな暴力が積み重なって、取り返しの付かないこと、すなわち戦争につながるのではないか。

しかし、逆も又しかりである。世界は沢山の国から成っていて、国は、人間の集団だ。集団は、一人一人が集まって出来る。私たち、一人一人が小さなことから変えていくことで世界は変わる。誰もが必ず誰かの幸せを願っている。誰かは自分自身でも構わない。

誰かの幸せのために、今自分に出来ることは何か、自分たちは何を変えることができるのか、ウクライナ危機が問いかける問題はそこにある。

この歴史は繰り返してはならない。